



死のしるし——脳死と臓器移植に関する教皇庁のワークショップ——

教皇庁科学アカデミー 著
 上智大学生命倫理研究所 監訳
 上智大学出版 発行
 ぎょうせい 発売
 2020年12月 428頁
 本体価格 3,500円+税

2006年9月ローマ教皇ベネディクト16世の時代に教皇庁科学アカデミーが主催した死の概念・基準としての脳死についてのワーキンググループの記録を教皇庁科学アカデミーが2007年に公刊し、13年の歳月を経て、12名の生命倫理の専門家によって翻訳され上智大学生命倫理研究所の監訳の下で本書がわが国に紹介された。

本書は2部構成からなり、第1部では、教皇庁の生命倫理、脳死批判の論点、わが国の脳死を巡る論争の経緯と死の判定・脳死に関する年表がつけられ、脳死を巡る概要がわかるように工夫されている。そして、本題の第2部は4つの章からなり、ワークショップの実際、17人の有識者による科学論文を踏まえた脳死に関する意見が紹介されており、用語解説がその理解を助けてくれる。死を知るためには生も知らなければならず両者を知って初めて生と死の境界がみえてくるのであろうと、医学のみならず、哲学、神学、法学など多角的視点から討論されている。

なぜ教皇庁がこの脳死と臓器移植の問題を扱うのか不思議に感じる人も多いであろう。本書のなかで、4体液説などから始まり生命、医学への関心が高まり、神のみぞ知る人間の秘密の扉をこじ開けようとする動きが宗教という壁に阻まれ、医学の進歩が停滞した歴史を反省し、天動説を提唱したガリレオの裁判の判決が誤りであったことを1992年にやっと認めたように、同じ轍を踏まないためにも、科学的に「死とはなにか」を捉える動きが生まれたことがその理由としている。

本文でも触れているが、以前は「息を引き取る」という言葉の通り、呼吸が止まったことをイコール死として捉えて差し支えなかった。しかし人工呼吸器、人工透析や人工心肺などの医療機器の開発に伴い、人工的な延命が可能に

なった。拍車をかけたのが移植医療の進歩である。移植の成功率を高めるためには、すべての生命活動が停止した状態を待つのではなく、死後速やかに臓器を取り出すことが求められた。移植の効率化が、脳死をもって死と判定をする動きを後押ししたことが十分推察できる。可能な限り良い状態で臓器をレシピエントに提供したいと思うことは、移植を行う医師として当然考えることである。

先日、とある会議で死亡診断書における死亡時刻の決定方法について、話題となった。

改めて、厚生労働省の令和3年度死亡診断書（死体検案書）の記入マニュアルを見直すと、死亡時刻は医師が死亡を確認した時間ではなく、明確にわからないときは死亡時刻を推定し、「時分」の余白に（推定）と記す。ただし、救急搬送中の死亡に限り医療機関において行った死亡確認時刻を記入できるようになっている。その場合、「時分」の余白に「（確認）」と記入することになっている。そして、『臓器の移植に関する法律』の規定に基づき脳死判定を行った場合、脳死した者の死亡時刻は、第2回目の検査終了時となり、したがって、死亡した年、月、日および時、分は、脳死判定に係る検査の第2回目の検査終了時刻を記入することになっている。このように生と死の境である死亡時刻を巡っても、状況によって異なるのである。

そもそも万人が経験する死を、医療という一面から定義することに無理がある。脳死を死として扱うことに抵抗がない人もいる反面、いざ身内の死を迎える場面に直面したときに、頭では理解できていても感情面ではすっきり割り切れないことも多い。何をもって「死のしるし」とするかはそう単純ではない。

本書では、基本的には脳死をもって死と捉えているが、そのなかで多くの有識者が様々な角度から討論し、紆余曲折している姿が描かれている。本書は知識を提供してくれるのではなく、「死」という難問に対してどのように考えていくかのプロセスを教えてくれている。

人の死を目の当たりにすることの多い医師にぜひとも一読することをお勧めする。

30年前に出版された『脳死』の著書である故立花隆氏が、草葉の陰で死をどのように感じたのか尋ねてみたいものである。

（忽滑谷和孝）